

## 神戸中華同文学校の多文化・多言語教育

### —学校コミュニティの維持・創造をめぐる—

立命館大学大学院 先端総合学術研究科

先端総合学術専攻 一貫制博士課程

ババ ヒロコ

馬場 裕子

昨今、外国人学校への注目が集まっている。従来から国際教育に関心をもつ保護者を惹きつけてきたインターナショナル・スクールだけでなく、民族文化の継承を目的に設立された民族学校である中華学校に児童を通わせる日本人も増加している。その主要な理由として、先行研究では以下の3点が指摘されてきた。第一に、中国の経済成長に伴う、国際語としての中国語の重要性の高まり、第二に、国内における多文化共生の重要性への注目、第三に、日本の公教育に対する不満や失望である。

本論文では、中華学校の経営理念や教育実践、国際化への対応を通じて変容・創出されるコミュニティ(スクール・コミュニティ)の特質を題材に、コミュニティに取り込まれたり、時にコミュニティから排除されたりする、立ち位置、利害関心の異なる者たちによって築かれる多層性に着目しながら、一つの共同体／コミュニティとして中華学校がどのようなダイナミズムを持っているのかを論じた。

本稿は、序章と終章で挟まれた5章構成となっている。序章では、中華学校を対象とする先行研究を、3つの研究群に整理し、それぞれの研究群における論点を整理した。また多岐に渡る研究では、中華学校の文化や理念・実践にかかわる何らかの「維持・継承」と「変容・革新」が扱われていることを指摘し、それらのふたつを中華学校独自の戦略に位置づけて考察する手掛かりとして、文化人類学における「ハイブリッド性」とコミュニティ論を提示した。

第1章では、神戸同文と横浜山手の開校までの経緯と115年間の学校史を概観した。第2章では学校を取り巻く華僑社会の構成と学校内の保護者集団の関係性を明らかにした。ここでは、学校を支える華僑コミュニティのフリンジに位置する者たちが、寄付や行事への貢献などを通してコミュニティの中心的な担い手となろうとする過程で、学校コミュニティが循環的に維持・創出されることを指摘した。

第3章では、中華学校の法的位置づけをめぐる問題に対して、神戸中華同文学校と横浜山手中華学校のそれぞれの経営者への聞き取り調査をもとに、どのように異なった対応をしているのかについて考察した。また、神戸中華同文学校の教育理念のひとつ刻苦奮闘に対する保護者および経営者たちの語り口が非常に似通っている点に着目して、定型化された賛美の語りが生産・維持される背景から、「文化」の規定・内実を変化させることなく、その解釈・コンセプトを時代状況に応じて巧みに変化させることで、学校コミュニティ内部に取り込むメンバーシップを拡大させるという共同体としての中華学校独自の戦略を指摘した。

第4章では、神戸中華同文学校における多言語教育の具体的な教育実践を検討した。まず同校の中国語・日本語・英語の三言語教育の変容を明らかにするために、1943年から現在までの小中学校の教育カリキュラムを分析した。次に、神戸中華同文学校の多言語教育、中

日バイリンガルの方法の特色を、研究が蓄積されているアメリカ・カナダの日英バイリンガルの方法・実践との比較により明らかにした。それを踏まえて、神戸中華同文学校の変則的な二言語併用型のイマージョン教育の実践・内容と、またそれを補う学習方法について検討した。最後に、これらの教育実践に対する異なる属性・立場の保護者達の評価の違いについて取り上げ、保護者間の評価の違いが表面化しない背景にも共同体としての戦略があることを指摘した。

第5章では、神戸中華同文学校の多文化共生のあり方を学習環境に踏み込んで検討した。日本語と中国語を併用する「同文語」が、学縁を中心としたアイデンティティと連帯意識を醸成していることを明らかにした。さらにこうした言語的な異種混濁性が、クラブ活動から遊芸会や運動会といった行事など学校の文化を形作っていることを説明し、多言語教育と多文化共生の両立がどのように模索されているのかを明らかにした。最後に、ここで展開されている多文化共生の基盤とは、立場や役割、場面や状況に応じて、言語や文化をその組み合わせのバリエーションとともに繰り出せる人間の育成であることを論じた。

終章では以上を総括し、中華学校の教育理念や経営理念が各時代の需要に応じた「不変の」文化や伝統として再発見され、内部に対しては「同文愛」としての寄付やコミットメントを、外部に対しては「現在の日本では失われた何か」として喧伝されることで、共同体としての中華学校が維持・再生産されていくプロセスを提示した。そこから本論文では、刻苦奮闘や同文語、ハイブリッド文化が「神戸同文らしさ／華僑らしさ」として了解されていく事態を、コミュニティ内部、コミュニティと外部の複雑な関係性に着目して丁寧に解きほぐすことが、多国籍化・多元化しつつある中華学校の各時代への適応戦略を論じるうえで重要であることを主張した。